



Title	先天性心疾患をもちキャリアオーバーする人の病気認知と心理的特性
Author(s)	仁尾, かおり
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47546
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 仁 尾 か お り

博士の専攻分野の名称 博 士（看護学）

学 位 記 番 号 第 2 1 0 3 2 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 19 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

医学系研究科保健学専攻

学 位 論 文 名 先天性心疾患をもちキャリアオーバーする人の病気認知と心理的特性

論 文 審 査 委 員 （主査）

教 授 藤原千恵子

（副査）

教 授 永井利三郎

教 授 荒木田美香子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究目的】

本研究は、先天性心疾患をもちキャリアオーバーする思春期にある人の社会的自立に向けた包括支援を検討することを目的とする。3つの調査で構成し、それぞれの目的は、以下のとおりである。①先天性心疾患をもち生活に制限を必要とする高校生が、自分の病気や病気がもたらす結果をどのように受けとめているかを明らかにする（調査1）。②先天性心疾患をもち生活に制限を必要とする高校生のレジリエンスの具体的内容を明らかにする（調査2）。③先天性心疾患をもつ中学生・高校生の病気認知の構造、及び背景要因による病気認知の差異、病気認知・背景要因によるレジリエンス、SOC（首尾一貫感覚）の差異を明らかにする（調査3）。

【研究方法】

調査1は、半構成面接法により調査し、16名から得られたデータを質的帰納的に分析した。調査2は、半構成面接法により調査し、16名から得られたデータを質的帰納的に分析した後、Grotrberg の考え方にに基づき、レジリエンスの『I Have』『I Am』『I Can』要素に分類した。調査3は、自記式郵送法による質問紙調査を実施し、172名の回答を分析対象とし、病気認知の構造、背景要因による病気認知の差異、背景要因・病気認知によるレジリエンス・SOCの差異を明らかにした。さらに、地域の中学生・高校生295名のレジリエンス・SOCとの比較を行った。

【結果・考察】

調査1：病気認知は「病気をもつ自分を理解してほしい」「病気をもっている自分には限界がある」「病気をもっても前向きに生きたい」など11カテゴリーが抽出でき、「限界」「可能性」「依存」「自立」という4つの中核概念が導き出された。

調査2：レジリエンスは、「病気をもつ自分を支えてくれる友達がいる」等『I Have』に4カテゴリー、「将来に夢をもっている」等『I Am』に4カテゴリー、「人に頼らずに自分で病気の管理ができる」等『I Can』に3カテゴリー、合計11カテゴリーが抽出できた。

調査3：因子分析の結果、病気認知は、『病気による制限・制約に対するつらい思い』『病気をもつ自分を前向きに受けとめようとする思い』『病状や死に対する不安』等6因子で構成されていた。病気認知は、チアノーゼの有無、服薬の有無、体育の制限等、疾患の重症度により差が認められた。また、病気を肯定的にとらえる人はレジリエンス得点が高いこと、病状や死に不安をもったり病気を知られたくない思いをもっている人はSOC得点が低いことが明

らかになった。地域の中学生・高校生との比較では、レジリエンス得点、SOC 得点ともに、先天性心疾患群が有意に得点が高かった。

以上の結果を統合し、社会的自立に向けた包括的支援を検討した。その一つとして、病気から発生した問題を抱えてキャリアオーバーするとしても、その人の心理的特性の肯定的な側面に着目し、困難を乗り越える力、ストレスに対処する力を伸ばすことで、社会的自立という課題を乗り越えることができることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

仁尾かおりの博士学位論文は、先天性心疾患をもちキャリアオーバーする思春期にある人の社会的自立に向けた包括支援を検討することを目的とし、3つの調査で構成されている。本学位論文の特徴は、調査1・2では、先天性心疾患をもち生活に制限を必要とする高校生の病気認知、レジリエンスの特徴を明らかにし、調査3ではそれらの結果を基に病気認知に関する測定尺度を作成し、先天性心疾患をもつ中学生・高校生172名の病気認知の構造、背景要因による病気認知の差異を分析し、さらに、病気認知・背景要因によるレジリエンス、SOC（首尾一貫感覚）の差異を明らかにしていることがあげられる。

病気認知は『病気による制限・制約に対するつらい思い』『病気をもつ自分を前向きに受けとめようとする思い』『病状や死に対する不安』等の6因子で構成されており、疾患の重症度により差が認められ、肯定的に病気を認知する人は、レジリエンス、SOC 得点が高いことや、先天性心疾患群が、地域の中学生・高校生（295名）よりも、レジリエンス得点、SOC 得点共に高いことが明らかにされた。これらの結果より、レジリエンス、SOC の発達を支援することが、病気から発生した様々な困難を抱えつつ、社会的自立という課題に取り組む先天性心疾患をもつ思春期にある人の包括的支援として重要であることを提言していた。

本研究は、思春期という社会的自立に向かう時期の先天性心疾患をもつ小児を対象に病気認知と内面の強さという心理的特性に着目したものであり、国内外でまだ取り組まれていない貴重なデータを示し、今後の先天性心疾患をもつ小児への包括的支援に寄与するものである。

よって、本博士論文は、大阪大学博士（看護学）の学位に値する。